

ジオパークの生き物

とち鹿追ジオパークの山々や平野は、キタナキウサギの亜種などの氷河期の生き残り種、独自の進化を遂げた魚、北極地方でより一般的にみられる寒冷気候の植物を含む、さまざまな命を支えています。ジオパークや付近の地域での考古学的発見からは、3 万年前頃から、十勝平野ではヒトが生活していたことが示されています。多くの動植物同様、ヒトもまた、最終氷河期（115,000-11,700 年前）にランドブリッジ（陸橋）を渡ってユーラシア大陸から非常に活発でした。

ランドブリッジ（陸橋）

8 万年から 1 万年前、地球の気温は現在よりもはるかに低いものでした。かつて今より多くの地球の水が氷で、最終氷河期（約 2 万年前）のもっとも寒かったころ、海水位は今より最大 120 メートル低い位置にありました。海面がより低かったため、浅い海底が現れており、現れた海底が、島々や大陸をつなぐ陸橋になっていました。北海道はサハリン経由でユーラシア大陸につながっていて、本州、四国、九州は朝鮮半島を通して繋がっていました。マンモスやキタナキウサギといった動物は、北部のランドブリッジ経由で北海道へ移動してきました。

二つの異なる生物地理学的地域

北海道の動植物は、他の日本の主要な島々である本州、四国、そして九州のものと大きく異なります。この理由の一つは、北海道と本州を隔てる深い津軽海峡です。海の水位が最も低かった時代

でも、本州と北海道がランドブリッジでつながることはありませんでした。そのため、多くの種が、この二つの島の間を行き来することはできませんでした。ふたつの島を隔てる生物地理学的境界に与えられた名が、ブラキストン線です。キタナキウサギ、キタキツネ、現在も存在する世界最大級のフクロウであるシマフクロウなどは、日本では北海道以外のどこでも見られない種のひとつです。